

TABLE FOR TWOかわら版 補足資料 ～Vol.18 フィリピン視察報告～

2014年12月発行

TFTプログラムをご担当くださっている皆さまへ

日頃からTABLE FOR TWOプログラム実施のため多大なるご支援を頂戴しまして誠にありがとうございます。本資料は、かわら版だけでは伝えきれない支援先の情報を皆さまにお届けするための補足資料です。貴団体内でのコミュニケーションやPRにご活用いただければ幸いです。今後とも引き続きのご支援、何卒宜しくお願い致します。

<補足資料Vol.18をお送りするにあたって>

2014年10月にTFT事務局の張が、新たな支援先であるフィリピン共和国のカステリヤホス村 バライバイ小学校を訪問しました。バライバイ小学校では、2014年6月より、栄養失調と診断された子ども達に給食が提供されています。今回の補足資料では、給食の実施状況の他、村や学校の基本情報、学校菜園の取り組みについてもお報告します。

2ページ目以降の資料は掲示板への掲出や、卓上POPとしてご利用いただけます。かわら版本紙、補足資料はともに、TFTのウェブサイトからダウンロードしてご利用いただけます。

<日本でのTFTプログラムの実施状況>

計666の団体で実施中（2014年11月28日現在）

内訳	団体数	比率
1. 企業(社員食堂、自販機)	314	47%
2. 学校	121	18%
3. 店舗・小売食品	138	21%
4. 官公庁・公的機関	46	7%
5. 病院	18	3%
6. その他	29	4%
合計	666	100%

<これまでに寄せられたご寄付>

* TFT事務局に入金された寄付金額ベースで食数に換算

2007年	5万6,737食分	
2008年	59万7,652食分	
2009年	212万2,627食分	
2010年	381万5,507食分	
2011年	579万8,653食分	
2012年	593万2,197食分	
2013年	638万918食分	
2014年（10月末まで）	505万9,412食分	⇒合計2,976万3,703食分

バライバイ地区は、村のはずれに位置しています



カステリヤホス村は、マニラからバスを乗り継いで4時間半ほどの場所に位置しています。そこから、5人乗りのトライシクル（サイドカー付きバイク）で山道を15分ほど登った村はずれが、TFTの支援先であるバライバイ地区です。ここは、1991年ピナツボ山噴火における被災者の再定住区として国によって建設された地域であり、村の中心などのコミュニティから地理的に離れています。

フィリピンは熱帯モンスーン気候に属し、1年を通して気温・湿度が高く、平均気温は25℃前後で年間を通して温暖です。視察に訪れた10月末は、雨期と乾期のちょうど変わり目であり、蒸し暑い気候でした。



バライバイ小学校には、幼稚園も併設されており、園児から小学校6年生まで、約750名の子ども達が通っています。

学校菜園で野菜の収穫が始まっています



学校菜園のお世話は、給食プログラムに参加している生徒が交代して実施しています。また、小学5・6年生とその両親は、月に2回実施される農業の授業にも参加し、野菜の育て方を学んでいます。学校菜園で学んだ知識を、家庭で実践することを目指していきます。
※給食プログラムに参加している生徒数は、栄養失調と診断された115名です。

6月に新設した学校菜園では、なすやかぼちゃ、青菜など、合計7種の野菜が栽培されています。収穫された野菜は、学校給食の材料として用いられます。現在は、先生が毎日往復87ペソ（約210円）をかけて村の中心にあるマーケットに食材の買い出しに行っていますが、収穫量を増やすことで、買い出しの頻度と費用の削減が期待できます。※この地区の家族あたりの平均収入は日給350-400ペソ（約850-950円）





フィリピンは、日本と同様に米が主食です。この日の献立は、ごはん、なすとマルンガイと豚肉の揚げ物、白菜と牛肉のスープ、バナナ、ココナッツジュースでした。毎日の献立は、家庭科の先生が、栄養バランスを考慮しながら決めています。

※マルンガイは葉っぱの一種で、木のミルクとも呼ばれる万病に効くとされる薬です。

バライバイ地区は、マーケットから遠く、農地もほとんどありません。村の中心街まで行く交通費が賄えず、野菜など生鮮食品を使わない食事（米、鶏、卵、ホットドック、インスタントラーメン）を食べている家庭が多いそうです。Gladysちゃん（7歳、写真右）もその一人。父は無職、母の家政婦の仕事で家族6人の生活を支えています。給食が始まる前、彼女は学校に来ないことがありました。十分な食事が食べられず、学校に来るエネルギーがなかったからです。栄養満点の給食が食べられる今、彼女は毎日元気に学校に通っています。



給食プログラムは、母親に雇用の機会を提供しています



調理から配膳、片付けまでの一連の作業は、生徒の母親30名が、毎週5名6週間ローテーションで担当しています。朝7時から準備を始め、11時～11時半頃には給食が提供されます。職をもたない母親たちにとって、日給100ペソ（約250円）は、家計の大きな助けになっています。

食堂として利用している部屋は、今年の春に増設された教室です。30名ほどしか座れないため、低学年から順に、約4回ローテーションして給食を提供しています。席が空くまで待ちきれずに、床にしゃがんで食べ始める子ども達もたくさんいました。



Iyron君（10歳）
父親と7人兄弟の8人家族。
朝ごはんは卵一個のみ。
将来の夢は「Kind person
（優しい人）になること」



Eralaineちゃん（11歳、写真右）は、数年前に家庭の事情で学校を中退しました。先生方による継続的な家庭訪問を経て、給食を機に今年から再就学しました。本来であれば6年生ですが、1年生の生徒とともに学び直しています。給食は、彼女が学校に来るモチベーションのひとつです。

午後1時。昼休み終了を知らせるチャイムが鳴ると、それまで夢中になって遊んでいた子ども達が一斉に教室に駆けていきました。バライバイ小学校は、学年問わず、午後5時までぎっしり授業が入っています。給食プログラムが始まる前は、十分な食事を摂れないまま午後の授業に参加していた子も、現在は集中して授業を受けることができています。



TABLE FOR TWOスタッフより



給食の時間の後、子ども達が遊んでいる様子取材していたら「一緒に遊ぼう」と誘ってくれました。カメラにも興味津々で、手渡して戻ってきた時には、おどけた表情やモデルポーズの写真などが撮影されていました。（上と右の写真も生徒による撮影）とても陽気で人懐っこいバライバイ小学校の子ども達に、元気をもらいました。

（TFT事務局：張）

学校給食プログラムが、子ども達の学習意欲につながり、母親の雇用をも生み出していることを、校長先生（下写真中央）はとても喜んでいました。「継続的な実施を通して、特に就学率の低いアエタ族の子ども達が学校に来るきっかけになれば」と話してくださいました。

※アエタ族はピナツボ山の先住民。見た目や文化の違いから差別が残り、貧困層が多い。



TFTスタッフの張（左）と提携機関スタッフ（右）